

地域との協働による水圏環境コミュニケーション学実習

池田玲子

東京海洋大学海洋科学部

1. 「水圏環境コミュニケーション学実習」の目的

「水圏環境コミュニケーション学実習」は、本学において実施している文部科学省現代GP「水圏環境リテラシー教育推進プログラム」の「水圏環境教育推進リーダー養成認定コース」に組み込まれた実習科目である¹。このコースでは、次の3つの能力を持つ水圏環境教育推進リーダーを養成することを目的としていた。第一に、海や川についての基本的な知識を持っている、第二に、その知識を他の人に正しく、わかりやすく伝えることができる、第三に、海や川についての広い視野を持ち、責任ある決定を促すことができる、の3つである。本実習では、とくに第二の能力に焦点を当てることにした。

この実習では、「協働」を基盤概念とするコミュニケーション力の育成を目指した。すなわち、正しく、分かりやすく伝える態度と具体的な方法としての「協働的コミュニケーション力」の育成である。ここでいう協働とは、①対等：互いの異なりの尊重、②対話：協働の手段・方法、③創造：新たに見出す解決策、④プロセス：対話のプロセス、⑤互惠性：互いに有益な成果、という5つの主要概念に特徴づけられる（池田 2007）。授業の目標としては、水圏環境をめぐる地域の人々が、持続可能な環境づくりのために協働する「学びの場」をデザインし、その企画を実施するところまでとした²。

2. 本実習授業の概要

初年度（平成 20 年度）の実習では、かつての海苔漁業地域を対象とし、以下の内容で実施した。

表 1 水圏環境コミュニケーション学実習の概要

実習生	学部 4 年生 (7 名) 3 年生 (3 名)
実習対象地	東京都大田区大森東地区 (かつての海苔生産地)
指導協力者	2 名 (海苔のふるさと館事務局長・大田区郷土資料館長)
地域協力者	12 名 (地域住民のうち 6 名は当日の情報提供者)
準備期間	平成 20 年 9 月～11 月 *企画実施日 11 月 22 日
企画内容	「大森海苔のまち歩き」 2 時間コース 参加者 15 名 企画の目的：大森の町や人に今も残る海苔の文化について語り合う。 目指すところ：かつての海苔の町の歴史と現在について、地域住民や周辺住民、大学生などさまざまな視点から探り、町の持続的な発展のあり方を考え合う。

¹ 本コースでは、他に「水圏環境リテラシー実習」も設けている。

² 実際には地域活動者（団体）同士の報告会においても、本実習の内容を報告する機会があった。

3. 本授業のプロセス

この実習の前年度には、本学の別のプロジェクト³において東京湾沿岸域の水圏環境を対象とした「持続可能な地域づくりのための大学と地域の協働活動モデル」が考案された。本実習は、このモデルを発展させるかたちで、その具現化を試みるものとなった。実習全体の流れは次のとおりである。

- 1) 事前学習（講義と調べ学習）：①東京湾の海苔漁業、生産方法の変遷、町の歴史と文化に関する文献学習 ②地域協働、協働の学びの場についての学習
- 2) 現地調査：町の様子や住民の日常生活について調査（実地散策・聞き取り）
- 3) 企画案作成・検討：現地調査の報告をもとに原案を作成し、検討会にて検討
- 4) 本調査：第一案をもとに情報提供者を確定し、その方々への聞き取り調査
- 5) 企画案検討：第一案についての検討後、修正第二案作成
- 6) 広報活動：プログラム作成、パンフレット作成、その他の配付資料作成
- 7) リハーサル（1）：第一リハーサルにて、雨天用のビデオ録画収録
- 8) リハーサル（2）：時間確認、情報提供者との最終打ち合わせ
- 9) 当日：午前中に直前リハーサル（最終） 午後 13:30 本番開始
- 10) 授業振り返りセッション：教室での反省会と個人の内省レポート課題
- 11) 発表・報告：実習のまとめレポート作成 地域での自主活動報告会にて報告

4. 実習生の学び

実習生の学びの実態は、頻繁にやりとりされるメール文、資料作成などの作業中に交わされる雑談、「プログラム案検討会」や「振り返りセッション」で議論された内容、実習生個人が書いた内省レポートなどから探ることができた。

実習生はこの実習全体を通して、水圏環境の持続的な発展のためにどのような方法があるのかのイメージを具体的にもてるようになったと感じていた。また、他者に「正しく伝えること」、「分かりやすく伝えること」のための協働的コミュニケーションの重要性に気づかされると同時に、地域協力者だけでなく、仲間同士の協働的コミュニケーションの困難さも実感していた。水圏環境リーダーとしての自己評価においては、実習生のほとんどが、本実習全体の中での自身の役割、位置付けを明確にしながら自己評価を試みるという特徴が見られた。

実習生がこの実習を経て新たに見出した課題は、1) 本実習で試みた水圏環境の持続的発展のための働きかけが、今後この地域でどのように展開させていくことができるのか、2) この事例をもとに、他の水圏環境地域においてはどのような応用が考えられるか。

参考文献

1. 『文部科学省現代的教育ニーズ取組支援プログラム選定事業 水圏環境リテラシー教育推進プログラム リテラシー教育に期待する人材育成の将来象』平成20年度報告書 国立大学法人 東京海洋大学
2. 池田玲子・舘岡洋子（2007）『ピア・ラーニング入門 創造的学びのデザインのために』ひつじ書房

³ 江戸前 ESD プロジェクト：「江戸前の海 学びの環づくり—持続可能な沿岸海洋教育」の略称。ESDとは Education for Sustainable Development の略。このプロジェクトは、東京海洋大学と東京湾沿岸地域住民との協働活動であり、2008年1月よりスタートし展開している。